
【テキスト中に現れる記号について】

《 》：ルビ
(例) 本郷《ほんがう》

|：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号
(例) 大正十五年四月十三日 | 鵜沼《くげぬま》にて浄書

[#]：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定
(例) [# 地から 1 字上げ] [遺稿]

大正十二年の冬(？)、僕はどこからかタクシーに乗り、本郷《ほんがう》通りを一高の横から藍染橋《あみそめばし》へ下《くだ》らうとしてみた。あの通りは甚だ街燈の少い、いつも真暗《まつくら》な往来《わうらい》である。そこにやはり自動車が一台、僕のタクシーの前を走つてみた。僕は巻煙草を啣《くは》へながら、勿論その車に気もとめなかつた。しかしだんだん近寄つて見ると、僕のタクシーのヘッド・ライトがぼんやりその車を照らしたのを見ると、それは金色《きんいろ》の唐艸《からくさ》をつけた、葬式に使ふ自動車だつた。

大正十三年の夏、僕は室生犀星《むろふさいせい》と軽井沢《かるゐざは》の小みちを歩いてみた。山砂《やまずな》もしつとりと湿気を含んだ、如何《いか》にももの静かな夕暮だつた。僕は室生と話しながら、ふと僕等の頭の上を眺めた。頭の上には澄み渡つた空に黒ぐるとアカシヤが枝を張つてみた。のみならずその又枝の間《あひだ》に人の脚《あし》が二本ぶら下つてみた。僕は「あつ」と言つて走り出した。室生も亦《また》僕のあとから「どうした？ どうした？」と言つて追ひかけて来た。僕はちよつと羞《はづか》しかつたから、何《なん》とか言つて護摩化《ごまか》してしまつた。

大正十四年の夏、僕は菊池寛《きくちひろし》、久米正雄《くめまさを》、植村宋一《うゑむらそういち》、中山太陽堂《なかやまたいやうだう》社長などと築地《つきぢ》の待合《まちあひ》に食事をしてみた。僕は床柱《とこばしら》の前に坐り、僕の右には久米正雄、僕の左には菊池寛、と云ふ順序に坐つてみたのである。そのうちに僕は何かの拍子《ひやうし》に鮎台《ちやぶだい》の上の麦酒罎《ビールびん》を眺めた。するとその麦酒罎には人の顔が一つ映《うつ》つてみた。それは僕の顔にそっくりだつた。しかし何も麦酒罎は僕の顔を映してゐた訣《わけ》ではない。その証拠には實在の僕は目を開いてみたのにも関《かは》らず、幻の僕は目をつぶつた上、稍仰向《ややあふむ》いてみたのである。僕は傍らにゐた芸者を顧み、「妙な顔が映《うつ》つてゐる」と言つた。芸者は始は常談《じやうだん》にしてゐた。けれども僕の座に坐るが早いか、「あら、ほんたうに見えるわ」と言つた。菊池や久米も替《かは》る替《がは》る僕の座に来て坐つて見ては、「うん、見えるね」などと言ひ合つていた。それは久米の発見によれば、麦酒《ビール》罎の向うに置いてある杯洗《はいせん》や何かの反射だつた。しかし僕は何《なん》となしに凶《きよう》を感じずにはゐられなかつた。

大正十五年の正月十日、僕はやはりタクシーに乗り、本郷《ほんがう》通りを一高の横から藍染橋《あみそめばし》へ下《くだ》らうとしてみた。するとあの唐艸《からくさ》をつけた、葬式に使ふ自動車が一台、もう一度僕のタクシーの前にぼんやりと後ろを現し出した。僕はまだその時までは前に挙げた幾つかの現象を聯絡《れんらく》のあるものとは思はなかつた。しかしこの自動車を見た時、殊にその中の棺を見た時、何ものか僕に冥々《めいめい》の裡《うち》に或警告を与へてゐる、そんなことをはつきり感じたのだつた。
(大正十五年四月十三日 | 鵜沼《くげぬま》にて浄書) [# 地から 1 字上げ] [遺稿]

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。